

## 南 洲 翁 遺 訓

- 1 廟堂びようどうに立ちて大政を為すは天道を行ふものなれば、些ちとも私はさを挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平とに操り、正道を踏み、広く賢人を選挙し、能く其職たに任ふる人を挙げて政柄せいへいを執らしむるは、則ち天意なり。夫れゆゑ真まに賢人と認むる以上は直ちに我が職を譲る程ならでは叶かなはぬものぞ。故に何ほど國家くんろうに勳勞有り共、其職に任へぬ人を官職を以て、賞するは善からぬことの第一也。官は其人を選びて之を授け、功有る者には俸禄ほうろくを以て賞し、之を愛しおくものぞと申さるるに付、然らば尚書仲井之誥しやうしよちゆうぎ こうに「徳懋さかなるは官さかを懋さかんにし、功懋さかなるは賞を懋さかんにす」と之れ有り、徳と官あいはいと相配し、功と賞と相對するは此の義にて候そうらひしやと請問せしに、翁欣然おうきんぜんとして、其通りぞと申されき。
- 2 賢人百官を総すべ、政權いつと一途に歸し、一格こくたいの國體定制無ければ、縦令たとい人材を登用し言路を開き、衆説を容るる共、取捨方向無く、事業ざつぱく雜駁にして成功有るべからず。昨日出でし命令の、今日たちま忽かち引き易いようふると云様なるも皆統轄する所一ならずして施政の方針一定せざるの致す所也。
- 3 政まつりごとの大體だいたいは、文を興おこし、武を振ふるひ、農を励ますの三つに在り。其他百般の事務は皆此の三つの物を助くるの具也。此の三つの物の中に於て、時に従ひ勢よに因り、施行先後の順序は有れど、此の三つの物を後にして他を先にするは更に無し。
- 4 萬民ばんみんの上に位する者、己を慎み、品行を正しくし、驕奢きやうしやを戒め、節檢を努め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民かみん其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、制令は行はれ難し。然るに草創そうそうの始はじめに立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾びしやうを抱へ、蓄財はかを謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊申ぼしんの義戦も偏ひとへに私わたくしを営みたる姿に成り行き、天下しきに対し戦死者しきに対して面目無きぞとて、頻りに涙もよおを催されける。
- 5 或る時「幾曆しんざん辛酸志始堅 大夫玉碎愧せんぜん頓全 一家遺事人知否 不為じそん兒孫買美田」との七絶を示されて、若し此の言に違ひなば、西郷は言行反したりとて見限られよと申されける。
- 6 人材を採用するに、君子小人べんこくの辨酷べんこくに過ぐる時は却かえつて害を引起こすもの也。其の故は開闢かいびやく以来世上一般十に七八は小人しやうじんなれば、能く小人の情を察し、其長所を取り之を小職に用い、其材藝ざいげいを盡つくさしむる也。東湖先生申されしは「小人程才藝有りて用便なれば、用

ひざればならぬもの也。さりとして長官に居る重職を授くれば、必ず邦家を覆すものゆゑ、決して上には立てられぬものぞ」と也。

- 7 事大小と無く、正道を踏み至誠を推し、一時の詐謀を用ふ可からず。人多くは事の指支ふる時に臨み、作略を用ひて一旦其の指支を通せば、跡は時宜次第工夫の出来る様に思へ共、作略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれ共、先に行けば成功は早きもの也。
- 8 廣く各國の制度を採り開明に進まんとならば、先ず我が國の本體を居る風教を張り然して後、除かに彼の長所を斟酌するものぞ。否らずして猥りに彼れに倣ひなば、國體は衰頽し、風教は萎靡して匡救す可らず、後に彼の制を受くるに至らんとす。
- 9 忠孝仁愛教化の道は政事の大本にして、萬世に亙り宇宙に弥り易ふ可からずの要道也。道は天地自然の物なれば、西洋と雖も決して別無し。
- 10 人智を開発するとは、愛國忠孝の心を開くなり。國に尽し家に勤むるの道明かならば、百般の事業は從て進歩す可し。或ひは耳目を開発せんとて、電信を懸け、鐵道を敷き、蒸氣仕掛けの器械を造立し、人の耳目を聳動すれ共、何故電信鐵道無くては叶はぬぞ。欠くべからざるものぞと云ふ處に目を注がず、猥りに外國の盛大を羨み、利害得失を論ぜず、家屋の構造より玩弄物に至る迄、一々外國を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、國力疲弊し、人心浮薄に流れ、結局日本身代限りの外有る間敷也。
- 11 文明とは道の普く行はるるを贊稱せる言にして、宮室の壯嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふには非ず。世人の唱ふる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分からぬぞ。予、嘗て或人と議論せしこと有り。西洋は野蠻じゃと云いしかば、否な文明ぞと争ふ。否な否な野蠻じゃと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆゑ、實に文明ならば、未開の國に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開昧昧の國に対する程むごく残忍の事を致し己れを利するは野蠻じゃと申せしかば、その人口を蒼めて言無かりきとて笑はれける。
- 12 西洋の刑法は専ら懲戒を主として苛酷を戒め、人を善良に導くに注意深し。故に囚獄中の罪人をも、如何にも緩やかにして鑒誡となる可き書籍を與へ、事に因りては親族朋友の面會をも許すと聞けり。尤も聖人の刑を設けられしも、忠孝仁愛の心より鰥寡孤独を

あわれ 愍み、人の罪に陥るを恤へ給ひしは深けれ共、實地手の届きたる今の西洋の如く有りしにや、書籍の上には見え渡らず、實に文明じゃと感ずる也。

13 租税を薄くして民を裕にするは、則ち國力を養成する也。故に國家多端にして財用の足らざるを苦しむとも、租税の定制を確守し、上を損じて下を虐たげぬもの也。能く古今の事迹を見よ。道の明かならざる世にして、財用の不足を苦しむときは、必ず曲知小慧の俗吏を用い、巧みに聚斂して一時の缺乏に給するを、理材に長ぜる良臣となし、手段を以て過酷に民を虐げるゆゑ、人民は苦惱に堪え兼ね、聚斂を逃れんと、自然橋詐狡猾に趣き、上下互に欺き、官民敵讐と成り、終に分崩離析に至るにあらざるや。

14 會計出納は制度の由って立つ所、百般の事業皆是より生じ、経綸中の樞要なれば慎まざらばならぬ也。其の大體を申さば、入るを量りて出づるを制するの外更に他の術數無し。一歳の入るを以て百般の制限を定め、會計を総理する者身を以て制を守り、定制を超過せしむ可からず。否らずして時勢に制せられ、制限を慢にし出づるを見て入るを計りなば、民の膏血を絞るの外有る間敷也。然らば假令事業は一旦進歩する如く見ゆ共、國力疲弊して濟救す可からず。

15 常備の兵數も、亦會計の制限に由る。決して無根の虚勢を張る可からず。兵氣を鼓舞して精兵を仕立てなば、兵數は寡くとも、折衝禦侮共に事缺く間敷也。

16 節義廉恥を失ひて、國を維持するの道決して有らず、西洋各國同然なり。上に立つ者下に臨みて利を争ひ義を忘る時は、下皆之れに倣ひ、人心忽ち財利に趨り、卑吝の情日々に長じ、節義廉恥の志操を失ひ、父子兄弟の間も錢財を争ひ、相ひ監視するに至る也。此の如く成り行かば、何を以て國家を維持す可きぞ。徳川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治めしかども、今は昔時戰國の猛士より猶一層猛き心を振ひ起さずば、萬國對峙は成る間敷也。普佛の戰、佛國三十萬の兵三ヶ月の糧食有りて降伏せしは、餘り算盤に精しき故なりとて笑はれき。

17 正道を踏み國を以て斃るるの精神無くば、外國交際は全かる可からず。彼の強大到に萎縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に従順する時は、輕侮を招き好親却て破れ、終に彼の制を受くるに至らん。

18 談國事に及びし時、慨然として申されけるは、國の凌辱せらるるに當たりては、縱令

國を以て斃たおるとも正義ふを踐み、義を尽すは政府の本務也。然るに平日きんごく金穀理財の事を議するを聞けば、如何なる英雄豪傑ごうけつかと見ゆれ共、血の出る事に臨めば、頭を一処いつしよに集め、唯目前ただの苟安ごうあんを謀るのみ、戰たたかいの一字を恐れ、政府の本務おとを墜しなば、商法支配所と申すものにて更に政府には非ざる也。

19 古いにしえより君臣共に己れを足れりとする世に、治功ちこうの上りたるはあらず。自分を足れりとせざるより、下々の言も聴き入るるもの也。己れを足れりとすれば、人己れの非を言へばたちま忽ち怒るゆゑ、賢人君子は之を助けぬ也。

20 何程制度方法を論ずる共、其人に非ざれば行はれ難し。人有りて後方法のちの行はるるものなれば、人は第一の寶たからにして、己れ其人に成るの心懸け肝要也。

21 道は天地自然の道なるゆゑ、講學こうがくの道は敬天愛人を目的とし、身を脩しゆうするに克己こつぎを以て終始せよ。己れに克つきよくこうの極功なは「母意 母必 母固 母我」(論語)と云へり。総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ。能く古今の人物を見よ。事業を創起する人其の事大抵十に八九迄は能く成し得れ共、残り二つを終る迄成し得る人の希れなるは、始はじめは能く己れを慎み事をも敬する故、功も立ち名も顕あらわるるなり。功立ち名顕るるに随い、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎きようくかいしんの意弛み驕ゆる矜きようきようの氣漸く長じ、其成し得たる事業たのを負み、苟いやしくも我が事を仕遂げんとてまづき仕事に陥り、終ついに敗るるものにて、皆自ら招く也。故に己れに克ちて、暗みず聞かざる所に戒慎かいしんするもの也。

22 己れに克つに、事々物々時に臨みて克つ様にては克ち得られぬなり。兼かねて氣象を以て克ち居れよと也。

23 學がくに志す者、規模を宏大にせずば有る可からず。さりとして唯此ただここにのみ偏倚へんいすれば或は身を脩するに疎おろそかに成り行くゆゑ、終始己れに克ちて身を脩する也。規模を宏大にして己れに克ち、男子は人を容れ、人に容れられては済まぬものと思へよと、古語を書いて授けらる。「恢宏其志氣者、人之志うらい。莫大乎自私自吝。安於卑俗而不以古人自期」  
古人を期するの意せいもんを請問せしに、堯舜ぎようしゆんを以て手本とし、孔夫子こうふうしを教師とせよとぞ。

24 道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也。

25 人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを盡し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬ可し。

26 己れを愛するは善からぬことの第一也。脩業の出来ぬも事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕謾の生ずるも、皆自ら愛するが為なれば、決して己れを愛せぬもの也。

27 過ちを改むるに、自ら過ったとさへ思ひ付かば、夫れにて善し、其事をば棄てて顧みず、直に一步踏出す可し。過を悔しく思ひ、取り繕はんと心配するは、譬へば茶碗を割り、其の缺けを集め合せ見るも同じにて、詮もなきこと也。

28 道を行ふには、尊卑貴賤の差別無し。摘んで言えば、堯舜は天下に王として萬機の政事を執り給へ共、其の職とする所は教師也。孔夫子は魯國を始め、何方へも用ひられず。屢々困厄に逢い、匹夫にて世を終へ給いしか共、三千の徒皆道を行ひし也。

29 道を行ふ者は、固より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否の死生杯に、少しも関係せぬもの也。事には上手下手あり、物には出来る人出来ざる人有るより、自然心を動かす人も有れ共、人は道を行ふものゆゑ、道を踏むには上手下手も無く、出来ざる人も無し。故に只管道を行ひ道を楽しみ、若し艱難に逢うて之を凌がんとらば、弥々道を行ひ道を楽しむ可し。予壯年より艱難と云ふ艱難に罹りしゆゑ、今はどんな事に出會ふ共、動揺は致すまじ、夫れだけは仕合せ也。

30 命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。去れ共、个様の方は凡俗の眼には見得られぬぞと申さるるに付、孟子に「天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば独り其道を行ふ、富貴も淫すること能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈すること能わず」と云ひしは、今仰せられし如きの人物にやと問いしかば、いかにも其の通り、道に立ちたる人ならでは彼の氣象は出ぬ也。

31 道を行ふ者は、天下挙つて毀るも足らざるとせず。天下挙つて誉むるも足れりとせざるは、自ら信ずるの厚きが故也。其の工夫は、韓文公が伯夷の頌を熟讀して會得せよ。

- 32 道に志す者は、偉業を貴ばぬものなり。司馬温公は閩中にて語りし言も、人に対して言ふべからざる事無しと申されたり。独を慎むの學推して知る可し。人の意表に出て一時の快適を好むは、未熟の事也、戒む可し。
- 33 平日道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、処分の出来ぬもの也。譬へば近隣に出火有らん、平生処分有る者は動揺せずして、取仕末も能く出来るなり、平日処分無き者は只狼狽して、なかなか取仕末どころには之れ無きぞ。夫れも同じにて、平生道を踏み居る者に非ざれば、事に臨みて策は出来ぬもの也。予先年出陣の日、兵士に向ひ、我が備への整不整を、唯味方の目を以て見ず、敵の心に成りて一つ衝いて見よ、夫れは第一の備ぞと申せしとぞ。
- 34 作略は平日致さぬものぞ。作略を以てやりたる事は、其迹を見れば善からざること判然にして、必ず悔い有る也。唯戰に臨みて作略無くばあるべからず。併し平日作略を用ふれば、戰に臨みて作略は出来ぬものぞ。孔明は平日作略を致さぬゆゑ、あの通り奇計を行はれたるぞ。予嘗て東京を引きし時、弟へ向ひ、是迄少しも作略をやりたる事有らぬゆゑ、跡は聊か濁るまじ、夫れ丈けは見れと申せしとぞ。
- 35 人を籠絡して陰に事を謀る者は、好し其事を成し得る共、慧眼より是れを見れば醜状著るしきぞ。人に推すに公平至誠を以てせよ。公平ならざれば英雄の心は決して攪らぬもの也。
- 36 聖賢に成らんと欲する志無く、古人の事跡を見、逆も企て及ばぬと云ふ様なる心ならば、戰に臨みて逃ぐるより猶卑怯なり。朱子も白刃を見て逃ぐる者はどうにもならぬと云はれたり。誠意を以て聖賢の書を読み、其の処分せられたる心を身に體し、心に験する脩業致さず、唯个様の言个様の事と云ふのみを知りたりとも、何の詮無きもの也。予今日人の論を聞くに、何程尤もに論ずるとも、処分に心行き渡らず、唯口舌の上のみならば、少しも感ずる心之れ無し。真に其の処分有る人を見れば、実に感じ入る也。聖賢の書を空しく讀むのみならば、譬へば其の人の劍術を傍觀するも同じにて、少しも自分に得心出来ず。自分に得心出来ずば、萬一立ち合へと申されし時逃ぐるより外有る間敷也。
- 37 天下後生迄も信仰悦服せらるるものは、只是れ一箇の嘖誠也。古へより父の仇を打ちし人、其の麗ず挙て數へ難き中に、独り曾我の兄弟のみ、今に至りて兒童婦子迄も知らざる者の有らざるは、衆に秀でて誠の篤き故也。誠ならずして世に誉めらるるは、僥倖の誉

也。誠篤<sup>あつ</sup>ければ、縦令<sup>たとい</sup>當時知<sup>こうせい</sup>る人無く共、後生必ず知己有るもの也。

38 世人<sup>せいじん</sup>の唱<sup>な</sup>ふる機<sup>き</sup>會<sup>かい</sup>とは、多くは僥<sup>ぎょう</sup>倖<sup>こう</sup>の仕<sup>し</sup>當<sup>あ</sup>てたるを言<sup>い</sup>ふ。真<sup>ま</sup>の機<sup>き</sup>會<sup>かい</sup>とは、理<sup>り</sup>を尽<sup>じん</sup>して行<sup>い</sup>ひ、勢<sup>せい</sup>を審<sup>つまびら</sup>かにして動<sup>うご</sup>くと云<sup>い</sup>ふに在<sup>あ</sup>り。平<sup>へい</sup>日<sup>に</sup>國<sup>くに</sup>天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>を憂<sup>うれ</sup>ふる誠<sup>せい</sup>心<sup>しん</sup>厚<sup>こう</sup>からずして、只<sup>ただ</sup>時<sup>とき</sup>のはずみに乗<sup>のり</sup>じて成<sup>な</sup>し得<sup>え</sup>たる事<sup>じ</sup>業<sup>ぎょう</sup>は、決<sup>けつ</sup>して永<sup>えい</sup>續<sup>ぞく</sup>せぬものぞ。

39 今<sup>いま</sup>の人<sup>ひと</sup>、才<sup>さい</sup>識<sup>し</sup>有<sup>あ</sup>れば事<sup>じ</sup>業<sup>ぎょう</sup>は心<sup>しん</sup>次<sup>じ</sup>第<sup>だい</sup>に成<sup>な</sup>さるるものと思<sup>おも</sup>へ共、才<sup>さい</sup>に任<sup>まか</sup>せて為<sup>な</sup>す事<sup>じ</sup>は、危<sup>あやう</sup>くして見<sup>み</sup>て居<sup>ゐ</sup>られぬものぞ。體<sup>たい</sup>有<sup>あ</sup>りてこそ用<sup>もち</sup>は行<sup>い</sup>はるるなり。肥<sup>ひ</sup>後<sup>ご</sup>の長<sup>なが</sup>岡<sup>おか</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>の如<sup>ごと</sup>き君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>は、今<sup>いま</sup>は似<sup>に</sup>たる人<sup>ひと</sup>をも見<sup>み</sup>ることならぬ様<sup>よう</sup>になりたると嘆<sup>たん</sup>息<sup>そく</sup>なされ、古<sup>こ</sup>語<sup>ご</sup>を書<sup>か</sup>いて授<sup>ま</sup>けらる。 「夫<sup>お</sup>天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>非<sup>ひ</sup>誠<sup>せい</sup>不<sup>ふ</sup>動<sup>どう</sup> 非<sup>ひ</sup>才<sup>さい</sup>不<sup>ふ</sup>治<sup>ち</sup> 誠<sup>せい</sup>之<sup>し</sup>至<sup>し</sup>者<sup>者</sup> 其<sup>その</sup>動<sup>どう</sup>也<sup>也</sup>速<sup>すみ</sup> 才<sup>さい</sup>之<sup>し</sup>用<sup>もち</sup>者<sup>者</sup> 其<sup>その</sup>治<sup>ち</sup>也<sup>也</sup>広  
才<sup>さい</sup>与<sup>よ</sup>誠<sup>せい</sup>合<sup>あ</sup> 然<sup>しか</sup>後<sup>ご</sup>事<sup>じ</sup>可<sup>か</sup>成<sup>せい</sup>」

40 翁<sup>おう</sup>に從<sup>したが</sup>ひて犬<sup>いぬ</sup>を驅<sup>か</sup>り兔<sup>うさぎ</sup>を追<sup>お</sup>ひ、山<sup>やま</sup>谷<sup>や</sup>を跋<sup>ぼつ</sup>涉<sup>しやう</sup>して終<sup>しゅう</sup>日<sup>に</sup>獵<sup>か</sup>り暮<sup>く</sup>らし、一<sup>いっ</sup>田<sup>てん</sup>家<sup>か</sup>に投<sup>な</sup>宿<sup>しゆく</sup>し浴<sup>よく</sup>終<sup>しゅう</sup>りて心<sup>しん</sup>神<sup>しん</sup>いと爽<sup>すわ</sup>快<sup>かい</sup>に見<sup>み</sup>えさせ給<sup>たま</sup>ひ、悠<sup>ゆう</sup>然<sup>ぜん</sup>として申<sup>ま</sup>されけるは、君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>の心<sup>しん</sup>は常<sup>じょう</sup>に斯<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>くにこそ有<sup>あ</sup>らんと思<sup>おも</sup>ふなりと。

41 身<sup>しん</sup>を脩<sup>しゅう</sup>し己<sup>おの</sup>れを正<sup>ただ</sup>して、君<sup>くん</sup>子<sup>し</sup>の體<sup>たい</sup>を具<sup>た</sup>ふる共、処<sup>しよ</sup>分<sup>ぶん</sup>の出<sup>い</sup>来<sup>き</sup>ぬ人<sup>ひと</sup>ならば、木<sup>もく</sup>偶<sup>くう</sup>人<sup>じん</sup>も同<sup>どう</sup>然<sup>ぜん</sup>なり。譬<sup>たと</sup>へば數<sup>すう</sup>十<sup>じゅう</sup>人<sup>にん</sup>の客<sup>きやく</sup>不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>に入<sup>い</sup>り来<sup>きた</sup>らんに、仮<sup>た</sup>令<sup>とい</sup>何<sup>なに</sup>程<sup>じやう</sup>饗<sup>きやう</sup>應<sup>おう</sup>したく思<sup>おも</sup>ふ共、兼<sup>かね</sup>て器<sup>き</sup>具<sup>ぐ</sup>調<sup>てう</sup>度<sup>ど</sup>の備<sup>そな</sup>無<sup>な</sup>ければ、唯<sup>ただ</sup>心<sup>しん</sup>配<sup>はい</sup>するのみにて、取<sup>とり</sup> 賄<sup>まかな</sup>ふ可<sup>か</sup>き様<sup>よう</sup>有<sup>あ</sup>間<sup>ま</sup>敷<sup>き</sup>ぞ。常<sup>じょう</sup>に備<sup>そな</sup>有<sup>あ</sup>れば、幾<sup>いく</sup>人<sup>にん</sup>なり共、數<sup>かず</sup>に應<sup>お</sup>じて賄<sup>まかな</sup>はるる也。夫<sup>お</sup>れ故<sup>ゆ</sup>平<sup>へい</sup>日<sup>に</sup>の用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>は肝<sup>かん</sup>腎<sup>じん</sup>ぞとて、古<sup>こ</sup>語<sup>ご</sup>を書<sup>か</sup>いて賜<sup>たま</sup>りき。  
「文<sup>ぶん</sup>非<sup>ひ</sup>鉛<sup>えん</sup>槩<sup>がい</sup>也 必<sup>かならず</sup>有<sup>あ</sup>処<sup>しよ</sup>事<sup>じ</sup>之<sup>し</sup>才<sup>さい</sup> 武<sup>ぶ</sup>非<sup>ひ</sup>劍<sup>けん</sup>楯<sup>じゆん</sup>也 必<sup>かならず</sup>有<sup>あ</sup>料<sup>りやう</sup>敵<sup>てき</sup>之<sup>し</sup>智<sup>ち</sup> 才<sup>さい</sup>智<sup>ち</sup>之<sup>し</sup>所<sup>しよ</sup>在<sup>あ</sup>一<sup>いつ</sup> 焉<sup>んぞ</sup> 而<sup>しか</sup>已<sup>し</sup>」

#### 追加

1 事<sup>こと</sup>に當<sup>あた</sup>り思<sup>おも</sup>慮<sup>りょ</sup>の乏<sup>おぼ</sup>しきを憂<sup>うれ</sup>ふること勿<sup>な</sup>れ。凡<sup>およ</sup>思<sup>おも</sup>慮<sup>りょ</sup>は、平<sup>へい</sup>生<sup>せい</sup>黙<sup>もく</sup>座<sup>ざ</sup>静<sup>じやう</sup>思<sup>し</sup>の際<sup>とき</sup>に於<sup>お</sup>てすべし。有<sup>あ</sup>事<sup>じ</sup>の時<sup>とき</sup>に至<sup>いた</sup>り、十<sup>じゅう</sup>に八<sup>はち</sup>九<sup>きゅう</sup>は履<sup>り</sup>行<sup>こう</sup>せらるるもの也。事<sup>こと</sup>に當<sup>あた</sup>り率<sup>そつ</sup>爾<sup>じ</sup>に思<sup>おも</sup>慮<sup>りょ</sup>することは、譬<sup>たと</sup>へば臥<sup>がし</sup>床<sup>じやう</sup>夢<sup>む</sup>寐<sup>び</sup>の中<sup>なか</sup>、奇<sup>き</sup>策<sup>さく</sup>妙<sup>めう</sup>案<sup>あん</sup>を得<sup>え</sup>るが如<sup>ごと</sup>きも、明<sup>めい</sup>朝<sup>ちやう</sup>起<sup>き</sup>床<sup>じやう</sup>の時<sup>とき</sup>に至<sup>いた</sup>れば、無<sup>む</sup>用<sup>じやう</sup>の妄<sup>わう</sup>想<sup>じやう</sup>に類<sup>る</sup>すること多<sup>おほ</sup>し。

2 漢<sup>わん</sup>學<sup>がく</sup>を成<sup>せい</sup>せる者<sup>もの</sup>は、弥<sup>い</sup>々<sup>い</sup>漢<sup>わん</sup>籍<sup>せき</sup>に就<sup>つ</sup>て道<sup>だう</sup>を學<sup>まな</sup>ぶべし。道<sup>だう</sup>は天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>自<sup>じ</sup>然<sup>ぜん</sup>の物<sup>もの</sup>、東<sup>とう</sup>西<sup>せい</sup>の別<sup>べつ</sup>なし。苟<sup>いやしく</sup>も當<sup>とう</sup>時<sup>じ</sup>萬<sup>まん</sup>國<sup>こく</sup>對<sup>たい</sup>峙<sup>し</sup>の形<sup>けい</sup>勢<sup>せう</sup>を知らんと欲<sup>ほ</sup>せば、春<sup>しゅん</sup>秋<sup>きゅう</sup>左<sup>さ</sup>氏<sup>し</sup>傳<sup>でん</sup>を熟<sup>じゆく</sup>讀<sup>どく</sup>し、助<sup>すけ</sup>くるに孫<sup>そん</sup>子<sup>し</sup>を以<sup>も</sup>てすべし。當<sup>とう</sup>時<sup>じ</sup>の形<sup>けい</sup>勢<sup>せう</sup>と略<sup>りやく</sup>ぼ大<sup>だい</sup>差<sup>さ</sup>なかるべし。

獄中有感

示外甥政直

朝蒙恩遇夕焚阬  
一貫唯唯諾  
人世浮沈似晦明  
從來鉄石肝  
縱不回光葵向日  
貧居生傑士  
若無開運意推誠  
勲業頭多難  
洛陽知古皆為鬼  
耐雪梅花麗  
南嶼俘囚獨竊生  
經霜楓葉丹  
生死何疑天附与  
如能識天意  
願留魂魄護皇城  
豈敢自謀安